

『この希望の神による一年』 ローマ人への手紙5章1-5節 2019.1.1 元旦礼拝説教より

『どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。』 ローマ 15:13

「この希望(5:5)」は、キリスト者が「義と認められ／神との平和を持ち／恵みの中で神を喜ぶ者となったこと」にある(5:1-4)！

①無条件に、手放して喜ぶ一年…神に義と認められた者が、無条件に、手放しに「患難を喜び／神ご自身を喜べる」のには理由がある。かつて神の愛に背いて滅びるばかりの罪人である自分が、イエスを信じて無罪とされ、その恵みの神を知り、その喜びが、どんな試練の中でも変わらず、「神との平和」(神との関係の回復)に至ったゆえに！世の全ての悩みは神との関係が壊れた結果であり、そこさえ解決すれば、問題自体はなくならずとも、悩みからは解放されていく！

②患難の中でも喜ぶ一年(3節)…「患難さえも喜ぶ」とは、患難そのものでなく、「患難の中でも喜ぶ」の意。どんなに辛くても失われない喜びがあることが証明される！十字架に架かり甦られたイエスの言葉。『あなたがたは、世にあつては患難があります。しかし勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝った(ヨハネ 16:33)』。信仰によって私たちは、どんな試練の中でも神の御手の中にあると知る。◆もし私たちが、人生の様々な困難が、神の完全な御計画に従って祝福と成長をもたらすことを「知っている(5:4)」なら、その試練がなぜ来たのか、苦難の意味、何をもたらすのかを「知っている」なら、試練の中で喜べる(ローマ 8:28)！パウロは、試練を喜ぶ信仰を教えるためにアブラハムに触れる。『彼は望みえないときに望みを抱いて信じました…(ローマ 4:18-22)』。何があつても失われないことがない希望の根拠は、私たちを愛される神の真実と、その神が遣わされた御子の贖いの事実に基づく。アブラハムが見ないで信じた、「あなたの子孫は星の数ほどに…」は、四千年後の今、全て実現した。ここでアブラハムの信仰を告げられた当時のローマ教会は、誕生したばかりの赤ちゃんで、「全世界へ救いを告げよ」との神の命令に耐えられる教会ではなかった。彼らはその後、ローマ帝国の激しい迫害と試練に遭う。しかし、この試練をも喜び、神を喜ぶアブラハムの信仰こそ、ローマ教会のため、そして今年、新たな歩みが始まる、のぞみ教会に、どうしても必要な希望と喜びのメッセージ！

★今ここにおられる方がこの信仰をもち、一人も欠けることなく、今年の年末に、その主の恵みの業を、その目で見て聖名を崇める一年としたい！